

「左様、左様被仰れば江川は彼通の氣性で、誠に齒がゆい様でしたが、然し貴嬢は如何して、江川の死だ事を御存です、誰から御聽になりました」

「はい、其はあるの父から承りましたの、父がふとし人から聽たといふ事でございましたね」

「おや、左様です歟、では貴嬢は、今では御尊父と一緒に御住居です歟、

「ハイ父と一所に居ります。もう種々と苦勞をしましてが、實に昔の事は思ひ出しても厭ですよ、其ですか私はもう、過去の事は一切思はず、唯現在と未來とに生やうと思ひます」

と言ふ折しも格子戸がらくと開て、誰やら若き女の聲で

「一寸姉様、あのお家の旦那がお目にかかりたいから、一寸来てお貰ひ申したいと被仰いました、何卒早く来て下さいまし、

歌代は是を聞附て、一寸瀬戸に會釋として立出たが、來た女に向ひ



『おや左様、今直あがりますて、何卒宜しく瀬戸は此應答を聞いて、長居は野暮と心得て歸り去た彼等は再び相遇ふ事もない、唯東京市中に女義太夫、歌代の名が聞ゆるのみ』

移民學園

紫琴女史

上

身は錦繡に包まれて、玉殿の奥深くといふ際にこそあらね。名宣らば扱はと、大方の人も點首く、良人に侍り。朝夕爨が炊ぐ米、よしや一年を流し元に捨たればとて、夫れ眼立つべき内證にもあらず。人は呼ばぬに來りて詔らひ、我は好まぬ夫人交際、夫れにも上坐を譲られて、今尾の奥様とぞ、離し立らる。是がそも人生の不幸かや。

春の花にも、秋の月にも、良人は我を棄玉はず。上野に隅田に二人の影、相伴はむことこそは、世事に繁き御身の上の御心にのみ任せ玉はね。庭の櫻の一片をも、我とならでは愛で玉はず。窓の月のさやけきにも、我在らずは背き玉ふ。涙は我得て是を拭はひ、笑みはそなたに頗たむと、世に優しくも待遇させ玉ふ、是がそも人生の不幸かや。況して我良人は、學識卓絶、經綸雄大、俠骨稜々の傑士にして、しかも温雅の君子なりと、名にのみ聞きて、他所にだも、敬慕せし君なりしを、ゆくらなき知遇により、迎えられて、妹よ背と、呼び呼ばれ參らする中とはなりし身なるをや。若し是をしも不幸といはゞ、將た何をかは、人生の幸とはせむ。

され絶對無限てふものは、彼惟一の御神とぞいふなる、大精靈大動力を除きての外になき限り、爭でか不幸の伴はぬ幸福の幸の伴はぬ不幸てふものあるべきや。若し満足を、開悟の外に求めなば、人は天地を我有とするも、未だ以て絶對の幸福とするには足らじ。一心茲に頓悟せば、身は三界に家なきも、亦以て幸とするには足る。悟れば幸も不幸もなき世に、悟らぬ内が人生の、おもしろ、うたての人の身や。

我より數には漏れぬ身の、差別の外には出難く、嬉し悲しは切なるを。なまじひなる幸福に、身を包めばど人知れぬ涙の淵には、沈むなる。美しきは世の中の、人の榮華を羨むほどの、無邪氣なる人々よ。縊縷の袖に置く露の、夫ればかりが悲しき涙か。錦繡の上に散る玉は、よしや生命の水なるも、飾れるものにあやまたれ、何ぞと人の問はぬにも、心は千々に碎くるなる。碎けて墜ちて、末遂に、もとの零の身となれば、憐れを人の訪ひもせめ、珠の輿にも乗れるよと、見ゆらむほどの今の身の、歎きをそもや誰にか語らむ。天は永久に高く、地は永久に低し、しかも天の誇りを聞かず、地の小言をしも聞かざるに。人ばかりは、束の間の、いふにも足らぬ差別を争そひ、何ぞと喧々囂々たる。淺問しどとは知る身にも、拗斷ち難き、恩愛戀慕の羈絆にぞ、斯くても世には繋がるなると、朝な夕なの御歎きを、知らぬ世間の口々に。さりとては、御氣隨意なる奥様や、世に成上りものは、是で否でござんする。嬉しさうな顔しては、お里が知れやうと思ふてか、何處迄行ても不足な顔、あ、か、かうかと機嫌を取る、且那も旦那、奥様が、憎らしいではござんせぬか。ほんに其事、私などは、年中世帶の腰帯ばかり、晴衣一枚着るではなし、芝居も機敷で、人らしう見せられた、覚えはさらへござんせぬ。夫れでも矢張脹れ物に、觸るやうにして居てさへ、又しても小言の八百。よしなば去ねといはれた處で、歸る里には父母もあり。兄はかなりな商法家、奉公人の三四人は、召使ふても居升れば、不自由は、良人の方にこそ。里へ歸れば母親が、甘いといふではござんせぬが。出戻とても家のもの、他家から這入た嫂などにひけとらす氣遣ひは、更々以てござんせぬ。夫れでも是が女子の役目と、辛棒すれば、よい氣になり。あなたの前ではござんすが、大事にしたは、其當坐、ほんの二月ばかりの事。やれ氣が利かぬ、おかめじやと、初手から知れた私の鼻が、急に低いか何ぞのやうに、高い聲での悪口も、頭腦の上を超せばこそ。すめばすむ、家請迄も兄の判母が、吳ます小使金が、帶側にもなる事か。帶は帶でも、世帶の方へ、廻したは、三上山を七巻、はんばものでも夫位の金高にはなり升る。夫れを恩にも着る事

か、他所の乙姫探してばかり。ほ、戯談ではござんせぬ。眞實女子に生れたほど、割の合はぬが定ならば、あきらめやうもござんすが。今尾様の奥様の御噂聞ては、なせかうも、同じ女子の運不運ふものかと、美貌に生れた身體の親をまで、つくと、怨み升る。夫れは私も同じ事、したがお聞遊ばせや。満れば缺くる鼻位、低い處で不具ではなし。人をのろはぬ證據の穴、一ツ揃ふて居るからは、夫れでも鼻を、よも人が穴とばかりは申すまい。夫れがむつくり小高うて、榮耀に凝た細工もの、手で揃らえたか何ぞのやうに、器用に出来た其尖頭には、得てして、天狗が引掛り、果は世上の笑柄、美貌が仇でござんする。近い例は今尾の奥様、押出しはよし、容貌はよし、御教育もあるとやら。やらへ盡しで殿達は、近來の大騒ぎ。何でもあんな細君と、獨身ものは尙ほの事。私といふものある前で、主人までが品評め。お前なんぞはそちらの隅にと、いはぬ計りの譽め方を、致した事もござんすが。譽れば、結句譏りの基因。氣になるからの詮索を、せなたがなさつたものじややら。今は知らぬものもない、お里方の根を洗へば、梢に咲いた花ばかり、美麗しや見えたとて、是もひよんなものじやのと。手に取れぬだけ、皆様が、思ひ切ての悪口を、主人の口から聞いた時、夫れ見た事かと、可笑さを、態と此方から纏かな資本の金貸業。夫れも父御は獨りもの、偏屈か、但し又廻らぬ世帶の窮屈か。婢も置かぬ男手に、御飯も炊けば、金も貸す。かすくの利足をば、あの人に入れ揚げて、何とやらいふ女學校へ、稚い時から預け切り、廿歳の時に卒業を、其儘其校に、教師三昧せられたも、思へば硝子の窓入娘、透徹るほど美麗しい、容貌の置き場が置き場のる。くる／＼巻の束髪には、惜しい姿と、今尾様、何處を廻つた手蔓やら。秋田様の娘様とて、御婚禮の其時ば、成程立派でござんした。大方夫れも拵え取りの、金に飽した衣裳なり、人形も流石、あれほどの、御人

品の名其當坐は、あつと人眼を眩ませた。夫れ迄はよかつたが。實父は間もなく何處へやら、引越といふ噂も、底を探れば、逃水の、捉まえ所もない行衛。何でも高利の貸仆れに、我も併れて、逃げたが定か。夫共にも、今尾様から、こつそり何處ぞに、貢いで、も居らるゝ事か。噂はさまく、先こそ知れぬ、隠居所が確にあると、申す事でござんする。でも區役所は、失踪と相場も極まつて、表向き、通路の出来ぬ、親持つほどの御身分を、お忘れなされた僭上沙汰。榮耀の餅の皮は、あのくつきりと美麗しいお顔に貼り付たやら。千枚張の鐵面しい、お鬱ぎ顔が分らぬと、女中達まで、どりくの噂は聞て居升たが。主人の口から申させれば、まさかさうでもあるまいがと、今に未練の冒頭を、残して居るだけ、憎らしうござんする。ほ、、ま際とい處で、やきくと遊ばすだけ、あなたはまだもお譽の新らしいと申すもの。私などは、土足の儘に踏暴さるゝ場所の扱い、嫉妬などは扱置て、うつかりすれば、今の間も、此身躰が焚きものに、つぶされてもせぬ事かと、腹が立つ其度毎、美しい種子にもしました、あの奥様の御身分も、今委しいお話では、餘りどうといたしませぬ。夫れでは矢張御見込通、それ程且那が出世をして、まだくといふ顔を、世間へ見せて、内實の喜びは隠して置く、是が上品高尚と思ひ違えた成上りの、根性でござんせう。其處を思へば、叱られても、不自由な世帶に縮んで居る、女子はまだも世間から、目指されぬと徳にして、じつと忍耐致し升う。ほ、御忍耐がせんなものやら、あてにはならぬあなた様のも、且那の方からお勤めを、羨んで居るもののが、ちつとは世間にござんする。あらまお人の悪い、夫れならさうと致し升う。でも私は主人にばかり、勤めさせは致し升ぬ。私からも一倍だけ。はいく夫れで澤山でござり升る。但旦那の御歳費が、二千圓の翌日から格別の御待遇ではござんせぬか。名ももさう内輪から、火を出すものではござんせぬ。夫れも是もお互に、獨目ならば知らぬ事。其身になれば、よしはが殖えた處で、家の手へ、落ちるものではござんせぬ。新橋や柳橋へ安心して流すだけ、山の神の祠は破損と申すもの。川上へ潤ひが廻るはねが覺り習ひなる可し。

中

さらとては草臥し。黨務だけも忙しい此身體を、内閣へ引張出されし其后は、夜ともいはぬ來客に、ろくく休む隙はない。夫れも然るべき要事なれば格別なれど。名ぞへ覺えぬ地方の黨員迄が、續々人材の登録望みには恐れるから。漸く不在と切上ても來たなれば、今宵は久し振、寛ろげるでもあらうかと、奥まりたる書齋へ、今しも遷坐の身をゆつたりと、椽側近く端居して、徐に髪を撫上たるは、彼今尾春衛なり。年齢は四十歳を、迫らぬはひ。今日結ひたての大丸韻も、俯首めの艶やかに、縞絹の浴衣は、すらりと肩を流れし恰好、何として是が女教師よりの夫人と思はる可き。笑みも溢るゝ、青葉の雪、あれ御覽遊ばしませ。人工の夕立はや、水打ました三藏が遊ばしたでござんしよにと、三尺去て、良人の傍、先づ何よりと、團扇の風、慰め顔に侍るは、是ぞ噂の其人なら大勧らき。螢が飛んで居るやうで、築山のあたりが、一層奇麗でござんする。官邸の月と御題を遊ばすも、御一興でござんせう。花やお湯をと取寄せて、煎茶手前もしそやかに、滴らす玉露の夫れよりも、馨り床敷此人をそ

もやそも誰がすまぬお顔と名け、む。獨り居てこそもの思へ、思へる事のありぞとは、良人に知られじ、知らざじと、思ひ兼ては、墜ちも来る、涙を受けて、掌は白粉も溶く薄化粧。紅も良人へ勤めぞと、物憂さ隠す身嗜み。瞼ばかりは、ほんのりと、霞に匂ふ遠山の、桜色をば其儘の、腥燕脂には代用して、粧ひ凝らす月と日も、積れば人處にどうして居玉ふとも、知らぬ父上なつかしや。假令ば何處の果とても、此處に斯くての一言を、我一人には夢になり、御沙汰し玉ふものならば、よしや來るなお詞を守るにしても、朝夕を、少しほ慰ひ方あらひ。乙紹のあれば、身を隠す、我は現世になきものと、偏に良人にかけよ。我は元來強情ものゝ、人交はは好かぬ身を、心に忘れても世の中に、血屬は一人の父にさへ、離れたる身の宿業を謹みて、春衛殿に、愛想竭さるゝな。我を何處ど、求めむ心の出なむには、夫れだけ多くを、良人に盡せ。盡して盡きし百年の壽命は今尾の土となれ。土となきも、世に辱あらむ夫よりは、身の秘密をば、社會の裡面に葬りて、悠久の天命をしも樂しむ可きを。なまじひりて、魂の彼世に逢はむ其時にぞ、今日の子細は語る可し。夫れ迄は、一つの秘密を持てる身の、よしや天地に耻なる孝念に、我所在を探らむは。我志を傷けて、我耻辱を世人の前に、曝露する所爲たるなり。我への不孝、良人への、不貞之上ある可らず。謹んで秘密をば、我行衛に、生涯手を觸るまじきものなりと。世にも不思議の御教訓を、寄せ玉ひつる其后は、御音信も、幾月を、絶入てこそ歎けども、是に濡れたる袖どとは、良人の御眼に掛けぬ御手紙は、生きての紀念、死ぬ迄は、何とも知らぬ御秘密のありと思へば猶更に、御身の上の氣遣はしく。ふり残されし身一ツに、雨をも、雪をも、御案じ申上れども。斯くと明せぬ切なさは、世に隔てなく待遇し玉

ふ、良人へ我から心の闇。父の爲には隠すをば、孝と思へば、貞ならぬ身はさらながらに大罪を冒せるものゝ心地して。優しきお詞聞く毎に、身を切らるゝより、尚ほ辛きを、じつと我慢の忍耐強く。我一人して御行衛を探りても見る夫れだけは、よしお詞に背いてもと。思ふ甲斐なき手が、りも、慰め兼し胸に泣き、口に笑ふが常なれど。何處如何なる際間より、涙の漏れて、世の人の譏りの種子とはなりにけむ。王者貴人も、恩愛の涙見せず居らるゝ國の、あらば其處にて譏らる可し。何を不足の我涙、淺い世間の推量は、まだもましかや、術なやど。世の蔭口にも謹みの笑窪加へて侍れば。只大凡に行衛知れずといふ事の、氣には掛れる春衛さへ、其當坐こそ慰められ。忙しき身の事々に、取紛れては、如才なき、妻に任せし家事心。忘れ勝なる此頃を、其事としも思はねはつと元氣を見せ。ほゝ、此瘦せでござり升るか、是は私の生れ性、夏はいつでも、今年など、まだも肥えて居り升る。夏瘦せは、醫師よりも、牛乳を精出して居り升れば。秋にはたんと肥え升て、女子の餘り不恰好など、お子。此節は顔色も善からぬを、病氣とは思はぬか。夏は格別、身体を大事に、早速醫師に見せてはと、いはれて、笑はせ申升ら。夫れよりもあなたこそ、此頃はお忙しい上の忙しさを、お案じ申て居り升るゝは、乃公か、乃公はそんな脆弱い身體でない。いはゝ是も道樂の、好きでする仕事に、疲れなどを出るものなら、疾うに死んで居る筈なり。まだ前途悠遠の、序開きといふ段で、がつくりとなる程なら、最初から政治などに、嘴は出せないさ。漸く政黨内閣といつた處で幼稚なもの、まだ二回目の最初一度は龍頭蛇尾、藩閥に回収された跡引受。誰も初役の、勝手は分らず、議論は多し。まだ中々國利民福を増進するの機關として、遺憾なは活動を見る迄に至らぬは、知切た事なれど。一旦挫折の運命に陥つた、政黨内閣の信用を、回復するが刻下の急ど、氣の進まぬ舞臺へ上つても見たなれど。そなたは乃公が進退の輕々しさを遺憾とし、齶ぎ出したといふ譯かなど、意

外の邊より疑問を下すも、妻の心を一轉せしめて、忽ちに憂鬱の原因を、看破らむものと思へるなり。清子は夫の心は知らぬぞ、力めての語調はいつもの爽やかに。ほゝ、まお六かしい、飛んだ事でござり升る。そんな事が樂さは、お忙しさを他所に見て、一人寝て待つ果報の數々。別しても此節は、何方からも、あなた様のお壽き私までの面目は、勿体ない程でござり升る。でも不似合な此身体を、どうしたものといひかけて、はつと口籠る其様子に、扱はと春衛は空とばけ。はての、奇体な事を聞くものだの。不似合とは、何が不似合といふのかの。年齢は、乃公に十歳劣りが、今始まつたといふではなし。此鬚面に、美人を配した不釣合、夫れを今更いふでもなからう。あ、分つた、扱は乃公の入閣と、官位望みと、思ひ違えた心から、人爵には感心せぬ。妻に似合はぬ夫よと、歎いて呟れるか。あ扱も、今尾春衛は妻にまで、疑はるゝ身となつたかと。態と額に手を加え、窃に清子を見遣れるも、尙ほ奥深き一物を探らむものと思へるなり。清子は夫が詞のはしく、いはで碎ける心をも、角々しき生利きごと、思召されむ夫れよりは、恩ふ心の幾何を、ほのめかしても見むものと。又しても其様に、思ひもせぬ事、お調戯ひ遊ばすのを、眞實の事を申升る。釣合はぬと申たは、御名譽のあなた様に、私如き不束もの。夫れも紳商の娘とか、申すならば格別と、人も沈黙て居り升れど。殿方よりは夫人の、身分貴いが流行升る、當節柄の人氣には、秋田様が眞實の里の方でない事を、人も知つて、兎や角の噂を致して居るとやら。うるさい事と思ふにつけ、身の不束が數えられ、是より後のお名折になるまいものかと、何とやら、すまぬ心が致し升ると、幽かにいふ事を打消して。はゝ馬鹿な、そなたの事なら今少し、理屈立て心配かと、思ひの外の拍子抜け。そなたは何時の間、どうした事で、さう迄主義が替りしぞ。譬喻に引くも異なるものなれど、所謂明治の元老が、その様な夫人を持つて、夫れが如何に社會から、好遇されて居るかを知らぬ、田舎ものゝ、寐言ならば、いざ知らず。都會に育つて、見

聞も狹からず。其上天爵人爵の差別も知つたそなたとしては、餘りなる、激語ではあるまいが。況して此乃公は、不肖ながらも、富貴利達を、目的とする、鄙劣漢ではない積り。良し經綸を施す上から、一時止むなく、入閣はした處で。夫れは世俗の所謂出世で、乃公が出世といふものか。無位無官でも春衛は、春衛。生涯を平民主義に献身せる、一書生としての、榮譽は更に大なる日に、そなたと結婚したならば、よし大臣が、總理でも、そなたど乃公の關係に、何の變りを見る事ぞ。そなたも春衛の妻として、世に立つからは、ぐつと氣を大きくして、自ら許す所を守り、飽く迄俗に反抗して。彼閨闥に依頼する無腸男子、持參にする横着婦人、此二ツをば、社會から驅逐する、大決心は持てない事か。あはゝ、矢張柳は柳のそなたに、無理な重荷は勧めまい。だが責て自分だけなりと、つまらぬ事を氣に掛けぬ、自信は持て貰ひたいと、噛んで含めし言の葉に、清子は何の咎はない、熱き涙を夫の膝に、月も雲間を漏れ出て、一人が中の何日迄も、かゝれかしとぞ輝きぬ。春衛は妻が掛念の種子の、解けても見えしを喜びて、分つたらば夫れでよい。分らぬ筈のそなたでなけれど、さういふ事が氣に掛るも、つまりは身体の虛弱から、兎も角齧師に掛るがよい。くそくいふではなけれども。全体此乃公は、最初秋田を里にといふ事がから、甚不本意であつたのなれど。そなたの父御が是非共に、誰かの養女分にもせずは、自分からは届けぬと、達ての主張に、餘儀なくも、其意に任せた一條は、そなたも知つて居る通り、いや父御といへば、其後の様子を頓と聞き。感謝に溶けし塊の、再び込み上げ来るをば、じつと押えて何氣なく。其事なれば、かならずく、お案じなさかず居たが、今だに便りはない事か。是も氣に掛らぬではなけれども、内憂外患さうくは届かぬから、内事はそなたに任せて置たが、是は不思議に氣にせぬなど。序ながらにひたる詞の、清子が胸にはひとつしとばかれて下さり升るな。兼ても申上升通り、一体が交際嫌ひの偏屈もの。お親一人一人の、私でさへ稚いから、傍に置くがうるさいとて、學校へ預けました其後は、日曜にも歸り升れば不機嫌の叱られるより、まだましかど、懷か

しさを堪へて居れば、三日にあげぬ慈愛の品、送つても呉れ升れば、稀には來ても呉れ升る、夫程可愛い私さへ、寄付升ぬ變りもの。廿年から東京に住居致して居りながら、交際にて、人間が、互に嘘をつきあひの、夫れが何になる事ぞと。友人一人ないを自慢の氣質には、私が身の落付きを、安心の前途にして。浮世の外の隠れ家に、身を避けましたでござんせう。よし夫れとても、人間の、思ひ出しては、可愛みを、訪ねても呉れ升うとの父の氣質を知る身には、安心致して居り升る。ついした愚痴から、お胸を痛め、御渡れの上の、御鶴陶を、麥酒にても致し升うかと。急にさゑく、延ばす右手の袖輕く、喚鉢に指頭の、かゝりける機もよし。書生の次間に畏りて、奥様にと差出す郵書、見れば名宛の我にはあれど、覺えなき手跡にて出處は、實父の名の歴然と記された。餘りの意外に顛ふ手を紛らはさむとや、身を起し。あのね、彼方へ行たらば、花に來てといひかけて。あ好いよ、私が行て吩咐升う、貴夫人振るも、可笑なるの、ねえあなた少しお待ち遊ばしてと。其場を体よく、夫の視線避けゝるも、書中の子細の危まるゝを、先づ私にと思へるなる可し。

下の一

七條の停車場といへば、新橋梅田の、夫れ程にこそ雜沓せざれ。四時の遊客絶間なき、京は日本の公園なれや。諸國の人々が乗降も、半は花に紅葉の客、夏は河原の夕涼み、流るゝ水の一滴が、勿も東都の土一升、千萬金の涼しさに、東の汗を洗はむと、西の都に來る人の、急がぬ旅も、急行の列車は乗せて運ぶ世の、一味平等、改札の口には、上下貴残なく、赤白毒のいろ／＼が、先を争ふ其中に。一人後れし丸齧の、際立つ風姿眼を注けて、是ぞ好客有難しこと、群がる車夫が口々に、奥さんどうぞ、お乗りやす。御勝手まで行きまひよかと。先づ京音の悠長を、つと避けて。茶屋が床几に腰掛けられ、女主の案内、特別に、奥座敷へと待遇すも煩はしく、なに急ぐんだから、此處

で好いのよ、夫れよりか、是で手荷物を受取て、人力車を直ぐにとひつて下さい。へいあの人力車、何處迄と申升う。はわたしか、柳原庄、錢坐村といふんだよ。へいあの柳原、夫れに違ひはござり升ぬかと、恠訝な顔に念押せる、是も京の名物かと、走らぬ人力車促がして、此處錢坐村といふを見れば。右も左も小さき家の、屋根には下駄の花緒を乾し、泥濘りたる道を跣足の小供等は、揃ひも揃ひし、瘡痂頭、見るからに汚なげなるが、人珍らしく集ひ来て、人力車の前後に囁し立るは扱もあれ、此二三町を過行くはせは、一種の臭氣身を襲ひ、えもいはれぬ、不快の感を、喚起せるも理や。葱の切れ端、鼠の死骸の、何日より此處には棄られけむ、溝には塵芥の堆く、たま／＼清潔き家など見るも、生々しき鬪皮の、内外には曝されたる、さりとては詫しさを、車夫に糺せば、個は穢多村なりといふ。穢多村の、其處に要ある此身にあらず、西京には錢坐村の、此外になき事か。へい／＼夫れは御尤でも、錢坐の村名は、此處に限るを、どうしたものと、車夫も不審を、引込兼ねるに。夫ならば是非もなし、よもやと思へど、此村に、河井太一といふお方の、ありやなしやを尋ねてお呉れ。へい／＼宜しうござり升ると、とある門邊に聲掛れば。白きものに、前掛けし女房の走り出で。太一さんなら其辻を、左へ廻つた三軒目、心易うして居るほどに、知れずば教へて上けやうと。袖なしはんてん引掛け、馴々しくも附添來るは、此珍客の來臨を、近處へ布告む下心、家並に聲をかけ行くも、かゝる處の習ひかと、人力車の上なる人の身は、土用の天にも粟立ちし、身の寒さをも覺えしなる可し。

お父さま、御氣分は、その様にござり升る。一時も早うと存じ升ても、十五時間、やう／＼只今着ました。喰かしお待遊ばしましてと。破れ疊に、煎餅蒲團、壁に向ひて臥したる老爺の、背後にしょんぼり、夢心地。坐りし膝も

落付かぬ、外面の人立ち、迷惑を、夕陽に寄せて、そつと縮め。ま何からお詫申さうやら、存せぬ隙に、東京を、お引拂ひの其後は、夜の間も忘れぬ御懐しさも、御教訓の重さにはと、思ひ替えて、朝夕を、一人で泣て居りましたに、思ひも寄らぬ昨日の御たより。やれ嬉しやも、心配の先立升る、御重病はやく來いのお報知は、あなたの筆かは知らぬぞ、どうでお許しあつての事。お目に掛れる嬉しさが、若し御病氣の心配なしに、來らるゝものなら、それ程にも嬉しからうと存じましたは、榮耀の沙汰。早速夫の許しを受け、御介抱に、参りました上からはもうく御安心遊ばして下さりませ。是迄はお一人の、御病氣では尚ほの事、御不自由でもござんしたらうが。かうして私、参り升た上からは、此處が何なら、病院でも、お心任せの御養生、その様に致してなり、屹度早々御全快はさせ升る。思ふたよりは、御氣分もお宜しさうなお寐姿、此分ならば今との間に、御全快は遊ばし升る。先づ何分にも、お心をゆるやかに遊ばすが、何よりのお藥ど。見るからに陥四みし、頬はかうでもなかりしに、さりとてはお疲れと。横顔ながら、身の瘦せも、思ひ知らるゝ悲しさを。何事なげにいひなしして、力付くるも、孝行の手始めぞとや、膝すり寄せ、脊の邊りを撫で掛る、手を病人は拂ひ退け、滅相な々々、何處のお女中様かは知らぬが、前刻から聞いて居れば、父御様にも仰るやうなお見舞は、何共以て合點が行かぬ。御風体なら、御人品、新平の親爺が娘に持つやうな、お人柄でもないものを、どう門違えなされたか。御身分にも拘はる事、早速お歸り下されい。違ひ。病氣の報知があつたとは、一切合點が行かぬ事。恐らく誰かの悪戯に、手紙を出した事かは知らぬが。隠すより顯はるゝ、お前様の住處を人に知られたは、一つの災難、もう是で、緒は出來たにせよ、好んで秘密を破るでもなからう。今の間ならば、門違えでも事は済む。世間へばつとせぬ内に、さ早う去んで下され、歸つて下さ

れ。縁は切ても、子の味知つた此親父、他所外の娘御でも、氣にかかる。新平の子と間違えられては、お前も立まし、お前様の御亭主は尙ほ立まい、夫のが父御の本懐か、門違えでも一言の、見舞は受けた此親爺、養生もする、死もせぬ、安心して歸らつしやい。是程いふに、もじくして、まだ立れぬか、歸れぬか、扱々鈍な女中じやの。えへわ夫れでは此親爺、叶はぬ腕にも立せて見せる、引張出すが承知かのと。危ふき足もとよろくと、立ち掛け身をばたり、あはやどいたはる女は涙、親爺も殘念共泣きの、涙は流石眼に充て、口ばかりは強さうに、歸れと續けたり。

折から門の戸引開て、入来る男は羽織かけ、鄙しからぬ風体は裝へ。どうやら爛れ眼、皮のもの、煙草入を手に提げて、せかりとばかり胡坐かき。太一怒るな了簡せい、龜相はおれじや謝罪わ。まあ女中も落付て、折角來たもの聞なさい。此中から太一が病氣、夫れはく大熱で、連もじやないが治療るまいと、かういふ村でも村中は、親類交際、素人より、親切なだけ心配する。中でもおれは、小僧の時分、太一には手習も教はつただけ、懇意も格別。此春太一が此村へ、廿五年の久しう振、歸つて呉れた其後は、兄弟同様人一倍案じるにつけ思ひ出し。何でも此地を出る時分、一人の乳母はあつた筈。何處へ置て來たともいはぬが、生きて居るなら、報告せて遣れ。若しもの事があつた時、跡の思ひが憐れぢやと、何遍いふても取合はず。旅の空で困つた時、親知らず子に遣つた。生死共に分らぬ娘、打遣て置て呉れ、逢たいとも思はぬと、只一口にいひ消せし。熱が嵩じた夢言には、又してもお清お清といひ續け。春衛さんが大臣に、ならしやつて目出たいわ。嬉しやお清、嬉しかる、逢はれぬが残念じや、連れぬ親の因果を見いと。一言目には、逢はれぬと、お清々々の其中には、春衛さんの、大臣が耳立て。はて何でも仔細があらうと、考へれば、成程な。噂の高い新米の大臣は、それも是も、一足飛びの出世の中に、今尾春衛といふ人が、確にあるといふ事に。是はてつきり太一めが、東京に居たとはいはぬが、詞は隠せぬ東京訛り。

よくある奴で遊所へでも、娘を賣つたが縁になり、其春衛とかいふ人の、傍に居るではなからうかと。な怒つては呉まいぞ、思ひ付さの當推量の夫れ程戀しいものならば、逢して遣るも功德じやと。二三日前、醫師の奴、是はと首をひねつた時。まゝよ、よしんば間違ふても、是が警察行にもなるまい。當るも八卦、當らぬも、八卦を當て見る積り。一時も早う来て呉れど、數から棒の手紙は書ても。東京の處は分らず。大臣の春衛が内で、お清様。是がさうなら大當り、お娘が出て来て、二人共、喜ぶ顔を見る時に、おれが手柄を吹聴しやうと。太一には沙汰なしで、手紙を出したは、猿智恵か。先刻嬢が話では、何でも立派な女客が來たとの事。併たゞ矢張當つたか、喜ぶ顔を見て來うと、是此様に、羽織まで、身裝をつくりて見て見れば。大あて違ひ、大失策、歸れ去ねいと太一が小言。戸外で立聞く、身の辛さ。お娘が氣の毒、可愛さに、怒られるのは承知の上、おれが遭遇と白状する。喜ぶ顔を見て來うと、是此様に、羽織まで、身裝をつくりて見て見れば。大あて違ひ、大失策、歸れ去ねいと太一が小言。戸外で立聞く、身の辛さ。お娘が氣の毒、可愛さに、怒られるのは承知の上、おれが遭遇と白状する。

太一、新平の娘といはせまいとの心配。親の慈悲はさうでもあらうが、來たからは詮方がない。今日一日を打掛て、誓を立てる。嬢はおろか、死ぬ迄も、口から外へ出しはせぬ。安心して逢ふて遣れ。なお清坊、そじやないか。お前は頗と知るまいが、おれは嘉平といふ太鼓屋、今年四十歳を出過もの。お手のものだけ廿歳の頃、でんぐりであれ、我かおれかい此村の通り詞じや。はゝゝ、失禮のはつれいのと、詞咎めをせまいぞ。囁く際も内外に、心を配るは立聞きを、おのれに懲りて見張番。嘉平が立つ居つするを。じろりと太一は見る眼の憂さ。坐れ嘉平、今更夫のが何になる、とばけた眞似をするないやい。戸障子を塞いだら、世間の口が塞げるか。馬鹿め是がどうなるぞと。怒りの聲も、身の疲れ、枕抱えて吐く息の、深くも心痛むるを。お辛度からう、撫でさせて

お清改めていふて聞かす事がある、少し其手を休めて呉れ。よ嘉平貴様も好きで出た角力、共々に聞いて呉れ。湯なり水なり欠け椀に一杯注で呉れぬかと、徐に咽喉を活しぬ。

下の二

あ殘念や、此太一は、京も中京さる町で、人に知られし醫師の子が、稚いから繼母に、かゝる身の習ひとて、おれは知らぬと僻み性の下女下男まで、弟御には似ぬ兄様よと輕蔑するも、矢張繼母の指圖かど、思へば萬事面白からず。好きで書物の一冊は、讀む屁から、弟や繼母の小聲が氣になつて。えゝも止せゝ、家に居て、こんな眞似しやうより、外で少しは氣晴しと、あてもなく出歩く内。悪い友には誘はれ易く、茶屋が二階の朝酒に、舌鼓打つ其頃は、菓子料や藥禮も、大方おれが袂のもの。父が手許の金までも、持出したを見付けられ、もう今日限り勘當と父親の立腹も、われ惡いとは少しも思はず。大方はも弟に、家繼がせむ繼母の讒言、欺されて無慈悲の父親怨めしゝと。勿体なや親心の今で思へば血の涙、勘當の意氣張を、その親類にも泣付て、託言いへば濟んだもの。お出て行升へ出ませいでか、親のものは子のものを、使ふたからとて、纏かな金に惣領を見替えるほどの親父様此方とても用はない。男子は裸体百貫を、錢の三百持たぬとて、身の置所ないものか。歸ると思ふて下さるなど十八歳の無分別、不孝たらぐて出て見たが。折世間は怖いもの、錢で買ふ深切は、家並にあつても、無代買える人の情は、京中に品切れの札掛けぬが山。親の光りは七光りの、光りに離れた身体では、八方塞がり、此方から寄ても人は寄せ付けず。たまゝ景物出すものが、親御様への詫言と、敬して遠のく工夫はしても、世渡る橋は掛ても呉れぬに始めてしめた親の庇陰、雨露にも打たれぬ内、親類へも行かうかと、幾度思はぬではなけれど。如何にしても廣言を、繼母に聞かれた上からは、男子がさうでもあるまいと、張にもならぬ張持つて、西も東も、行詰

りたる味氣なさ。まさか死なんと思はねど、桂へ行てもおもわくの違ひし足の遣り端なく。夜深の人も通らぬを、幸ひの思案場處。桂の橋の欄杆に、水音聞て居る處へ、通り掛つた人こそは、後に舅となるほどの、深い縁か。其時から他人ではない深切に、我を身投と思ふたか。是非其家迄送らふと、強られては包まれず。歸るに家なき勘當の身と斷れば、尙ほの事、夫れはさうでも見離せぬ、何日迄なりと逗留と、連れられたは闇の夜の、月にも見離されたる身、まさかに此村であらうとは、心注がぬも尤か。座敷の裝飾、主人の風体、夜明けて見ても一廉の大商人が夫婦して、親にも勝る深切づく、お顔がさしてもなるまいと、店の方は、切て、何商賣と分らぬど、座敷にばかり待遇さる、身は詮索の要もなく。一日二日の休み場と思の外の逗留も、娘に彈せし琴の音が、我心も引止めしか。まゝよ歸れといふ迄はと、腰を据えしが一期の不覺。素人を陥す寢どは氣も注かず。冷たい母の懷に、人となりたる此身には。世に珍しい人々の情に月も日も忘れ。身を忘れたる其後に、素生を斯くと悟りしも。もう遅かりし、行末を、娘に契つた後の事。つらく思へば世の中に、此仙境もあつたもの。外を奇麗に、内心は如夜刀の中に住むより、人は穢多どもいはやいへ。人の心の花こそは、かういふ中に咲くものを、折て棄てるが素人の、穢多にも勝る根性かと。理屈はさうでもつき次第、日が経つにつけ、淺間しと、見た眼も曇つて、皮臭い匂ひも頓と鼻にはつかず。其儘此村に入聟の、實を結んだは、そなたの一粒。見るにつけても思ひ出す、親様は嘸心外。如何に若氣の誤りも、一生此村の芥になれど、勘當はなざるまい。人間の屑、男子の屑、親兄弟を笑はせて、生れた子まで屑にする、おれは所詮仕方もなけれど。穢多の唱も、平民の時節になつて生れた子を、何の遠慮に一生涯、此村に育てゝよいものぞ。先祖の遺体、責ては是を、そなたの一粒。見るにつけても思ひ出す、親ふ心を悟りたる、妻も同意は、乳呑子の、そなたを置いて病死の際。さふぞ此子が穢れた血を、あなたのお手で洗ふて下され。河井の家名はさうでもよい、家庫は此子のもの。素人を父様に持つたお蔭で此子まで、清まる事なら

先祖とて、何の否を申升す。此子の祖父母二人共、既度冥途で喜ぶ顔、私は今から眼に見えて、嬉し死んで行き升ると。つと笑ふた其顔は、生れに似合ぬ、美麗しい心のものであつたぞよ。其所でおれが心も決定り、家庫を金錢にして、東京へ引越した其後は。我出所をば知られじと、藉も移して家も買ひ、身持律義にして居たれば。誰穢多村の出身と、知らぬを幸ひ、學校へをなたを預けて。我一人金貸世渡も、手を廣げず、人交際もせぬ理由は。ついした話談の緒に、身柄を人に悟られまい、無益な金を使用ふまいと、其用心に、何も角み、一心手に藏めて置き。天晴れの男に添せむ其時に、拭えぬ曇りは是非もなし。諸藝は素より、衣類や調度、金で買はれる光だけ、責ては添えて遣らふものと、一心込めた親心。廿餘年を、何樂しみの偏人生活、友にも、血にも、關係はたへた一人のそなたまで、傍には置かず、すげなうしたは。さうで嫁入さする時、親と名告らぬ積りの身体、もした顔を見ぬとて見えぬ親の眼が、偏人は偏人の泣きやうもした廿年。其甲斐ありて、ありとある、男の中初手から離れて居るがましと。可愛さと、人並の可愛さにはせぬ心の錠。三年五年は兎も角も、廿年を其癖は、是が眞實の偏人に、ならず居らるゝものかいやい。左こそは無情い父様と、不審も立た事であら。泣きも怨みおれが。自分ばかりは此村の土となりたさ、多からぬ餘命を隠れて済む積りが。頭隠して尻隠され、不念が基因の此失策を、何とそなたに謝罪らう。かうと知つたら、兼てより、身の素性をばそなたにも打明て置たなら、其心得もあつたもの。知らせては一生を、心に咎めて暮さうかと、生中の可愛さを、残して置たが、失策の種子となつ

たか殘念也。もう此上は詮方がない。假令嘉平はいはずとも、物事萬事小細工に、包めるものと思ふたは、おれの誤り、何處ぞから、世間へばつとしてからは、聰殿が尙ほ氣の毒。親爺一人は怨まれまい。父娘一人が同腹で、是迄乃公を欺したかと、痛まぬ腹を探られては、此后的そなたが心も濟まい。思ひ切つて今の間に、そつと離縁を取つて來い。夫共にも聰殿が、男を立て、離縁せぬ、新平でも構はぬといはる、ならば、夫れこそ重疊。此親爺は素より亡ものと思ひ捨、百千倍も身を責めて、並の女子が貞女には、萬倍貞女の手本になり、新平の娘が汚れたか、見ん事間に見て貰へ。今の思案は此二ツ。さ、一刻を後れては、一人の噂を増す道理。嘉平人力車のある處まで、荷物を持つて送つて遣れど。病苦をもの、數どもせぬ、老の一轍金錢の詞に籠る慈愛の數。さりとては斯く迄も、我を思召すども、知らぬ心の子心に、今も今親を怨んだ勿体なさ。父様許して下さりませ。お道理はお道理でも、是程のお煩ひ、親を見捨て、歸るのが、まこと貞女の道ならば、孝行はその身體でいたし升う。かういふ身分が入りらず、此儘に御介抱申上たが、濟ぬと夫が申すなら、夫れは先方から違え升る、道は此方の知らぬ事。よも春衛とて夫れ程の、沒理漢ではござんすまい。幸ひ昨日のお手紙と、見せました其時にも、乃公は行かれぬ身體だけ、そなた二倍の御介抱を進せて呉れ。誰なりとも手助けに、一人一人は召連れてと、心添えならば安心の御容体が見えての事に致し升るも、左程遅うはござんすまいと。口には平氣を裝へど。思へば是が一年か二年に足らぬ契りでも。普通の夫婦を見るやうに、人手任せの氣も知らず。出雲の神様はあ是が、私の大妻か妻かとて。合せられての其上に、無理に合せた縁ではなく。他人で逢ふて、最負眼も、ない間にちやんと見て置て、許し合ふた上からは。添ふたが一日半時でも、身體ばかりが双棲の、生涯を連添ふて、生涯氣心も知

らずに仕舞ふ、雑様の夫婦とは違ふもの。千萬年の馴染にも、まさると思ふ其中で。夢見たやうな身の素性、是だけは、私も存じませなんだ堪忍してと。打つけに、我から破れる相談が出来やうものか。おめくと、良人に顔が合せる程なら、離縁との、決心も要らぬ事。夫よりも合せ顔を此儘此村に御介抱。一生を、是にて果るつもりにして、手紙だけにも其よしを、通じて置かば、一度再び、夫の顔は見ぬとても、生涯を憐れのものよと、思はれて、暮せるだけがまだしもの本望とは、私が愚痴は勝手にせよ。廿餘年の御高恩、私ばかりは人並のものになれよと御養育、海山の御慈愛も、親はさうしたものにせよ。子は子の情もあるものを。此儘にお傍離れて歸宅つた上、若し其素性構はぬといはるゝならば私とて、無理に離れる氣も抜けやう。さうした時は夫へ不貞、あなたには、兼てよりの御氣象。私ばかりの仕合せを御本意の、親でない子でないと、お便りも絶えての後は御奉行も、どうしてしやう様もない、夫が本意でござんしよかど。いはれぬ心の數々を、思ひ残してもじくする清子をはつたと太一は睨み。まだ行かぬ馬鹿めが。おれが病氣が氣に掛るか。定命ならば娘の手で介抱を受けたから平をはじめ、村のもの、深切な中なればこそ、歸りもした。夫れをまだ氣遣ふて、うかくする半晌は、此おれが何十年の苦勞を無にする半晌と、心注かぬ馬鹿者めが。あれ程いふたに此おれの心が分らぬ大馬鹿もの、もう其驚。ひやあ太一さう迄も怒らぬものじや、病氣の毒じや勘忍せい。悪いはおれじや、ま、待てやい。お娘はおれがいひ聞かず、いひ聞かすから、聞け太一、待て呉れ是お娘じ。間違ひだらけ一息吐き。扱もく六かしい、義理も理屈ももつたもの。餘計な事をして退けた、おれが失策。聞く程にの、見る程にの、どう謝罪らうやうもない。

悪いはおれじやが、謝罪て濟ぬ此場じや、なお清坊、聞分けて立て呉れ。頼む拜む是お清坊。お前が此家に居る内はの、太一は怒る、お前が泣く。どちらも尤々と聞てはおれが堪らぬじや。おれがせつばを助けると、思ふてやつと出立て呉れ。其代りには此おれが、何處迄も、太一の身體は引受け、お前の代りに介抱する。な太一そじやないか、お娘が孝行しやうといふに、お前が怒る法はない。共々にお前も頼め、おれもいふ。素直に出立て呉れるのが、是お清坊、孝行といふものじやと。嘉平が其身に引受けて、先に立てる出揃え。太一も流石見ぬ振に、見送る眼はつたりと、見返る顔に出逢ふては。嘸悲しやの一零、道の泥濘も歸るさは、戀しき土地の紀念空しき聲に終らむ夫れよりも、人は女々しと笑はゝ笑へ、人道の爲め、始く身を教育事業に轉じつ、徐に時機を待つべしとて。あらゆる資産と共に、身を北海道に移しけるも。稚きより境遇が生む自棄の子の、あはれ全國其所此所に散り布けるを、移民學園でふ名の下に一括し。土地と共に心さへ新らしき民にして育てむとて。あらゆる新平の子女を我手に贋ひ得つ。おのれは父よ、清子は母よと笑語一番。衆家族を率ひて出立ちしを。上野にだに見送りしは、二三の高士のみとぞ聞えし。

幾日もなく、今尾大臣辭職の飛報は、世人の耳を驚かしゆ。其は今尾夫人が、新平の出身、世に隠れなきと同時に。さる身を以て、畏々邊りに、拜謁の榮を辭しまづらざりしは、如何にもく恐れ多き事なりとの。至てく小兒らしさ感情問題を以て、敵黨の乗する所あらむとせしを。時の總理は一笑に付し去りて顧みざりしも。今尾大臣は、是に對して、大に悟る所あり。文明の器に盛るに、蠻野の心もて、争奪之事とせる渦中に投じ、生涯を空しき聲に終らむ夫れよりも、人は女々しと笑はゝ笑へ、人道の爲め、始く身を教育事業に轉じつ、徐に時機を待つべしとて。あらゆる資産と共に、身を北海道に移しけるも。稚きより境遇が生む自棄の子の、あはれ全國其所此所に散り布けるを、移民學園でふ名の下に一括し。土地と共に心さへ新らしき民にして育てむとて。あらゆる新平の子女を我手に贋ひ得つ。おのれは父よ、清子は母よと笑語一番。衆家族を率ひて出立ちしを。上野にだに見送りしは、二三の高士のみとぞ聞えし。